

## 投影法と自尊感情尺度を用いた地域高齢者の介護意識に関する検討 —介護規範と介護における関係性に関する検討—

川井 八重・住田 優子・土屋 紀子

(在宅看護学)

### Investigation Using Projective Techniques and the Self-Esteem Scale into the Perception of Caregiving Held by Older Community Residents : Investigation of the Relationship between Care Models and Care

Yae KAWAI, Yuko SUMIDA, and Noriko TSUCHIYA

*Home Nursing Care*

**Abstract.** Using projective techniques and a self-esteem scale, an investigation was held to discover how nursing care is perceived by an older population (N=51 ; Male : N=7,75. 4 + -3. 0 years old ; Female : N=44,75. 0 + -5. 0 years old).

Subjects were attending a community class for older citizens in N City in Kochi Prefecture, but were not in need of nursing care.

Subjects were presented with cards depicting a caregiver taking care of a person in need of nursing care with speech balloons for each. Subjects were then asked to fill in the speech balloons with whatever words they wished. They were then given a list of people ("father, mother, husband, wife, son, daughter, daughter-in-law, home-helper") and then asked to choose one to associate with the caregiver in the picture, and one to associate with the person in need of nursing care. Subjects were then asked to take the self-administered Rosenberg Self-Esteem Scale. This was scored by the examiner and its results were analyzed in relation to the speech balloon activity.

The following results were obtained :

1. Subjects selected "daughter-in-law, wife, daughter" as caregivers. These are traditional caregivers. However, among subjects over 80 years old, non-traditional caregivers were selected : "son, home-helper, husband."
2. Subjects described the interaction between the two people in the picture as being one in which the person in need of nursing care was complaining of pain and suffering while the caregiver was providing care and offering words of encouragement. Subjects assumed that the caregiver fulfills whatever request the person in need of nursing care makes.

3. Younger subjects tended to identify with the caregiver, while older subjects identified more with the person in need of nursing care.
4. Subjects with low scores on the Self-Esteem Scale tended to project pessimism into the situation of needing nursing care.
5. Results 1 - 4 above are evidence of a tendency for people in need of nursing care to have a more dependent attitude.

## 要 約

高知県 N 市の高齢者教室において、介護を要しない高齢者 (N=51, 男性: N=7, 75.4±3.0才, 女性: N=44, 75.0±5.0才) を対象に、投影法及び自尊感情尺度を用いて、高齢者の介護意識について検討を行った。

調査方法は、調査者が「要介護者を介護者が介護している絵で、2人のそれぞれに漫画の吹き出しがある絵」を提示し、吹き出しの中に自由に言葉を記載してもらう方法であった。さらに、調査者は被験者に「父・母・夫・妻・息子・娘・嫁・ホームヘルパー」の記載のある用紙を渡し、その中から要介護者を1者、介護者を1者、それぞれ選び出してもらった。同時に、被験者は Rosenberg, M. の自尊感情尺度表を自記式で記載し、調査者はそれにもとづいて得点を算出し、関連性を検討した。

検討の結果、以下の項目が考えられた。

- ① 被験者は、介護者として「嫁・妻・娘」を想定していた。それは、従来の介護規範と同様であった。しかし80才程度以上の被験者では、従来の介護規範以外の介護者を想定していた。すなわち、「息子・ホームヘルパー・夫」を介護者として想定していた。
- ② 被験者は、要介護者と介護者の関係を「痛苦を訴える要介護者を、激励しながら世話する」という形態で想定していた。また被験者は、要介護者が要求したことを介護者が無条件に行うという想定をしていた。
- ③ 被験者のうち、年齢が高い被験者は自分を要介護者と想定し、若い被験者は介護者と想定する傾向が見られた。
- ④ 被験者のうち、自尊感情尺度得点の低い者は、悲観的な要介護状態を想定しやすい傾向が見られた。
- ⑤ 上記の①～④の項目は、要介護者が依存的態度になり易いという傾向を示唆していた。

## 1. はじめに

介護保険法が施行されて3年半が経過した。同法律の施行は、地域における介護サービスの

充実が目的の一つとされている。今後ますます高齢化が進行するわが国では、国民の介護に対する意識の変化が望まれている。すなわち、国民一人一人が介護予防（要介護状態を予防する）への努力を維持することや、介護保険による社会的サービスを導入することなどにより、介護を受ける国民の生活の質を向上させることである。

一方わが国では、介護に関して社会的規範の存在が従来から指摘されている。それは、①家族による介護 ②家族の中の女性による介護 ③嫁・妻・娘による介護 が期待されるという規範である。しかもこの規範は「個人の意思など超えた強制力<sup>(1)</sup>」を持ち、同時に「大きな犠牲と献身を介護者に強いる<sup>(2)</sup>」とも言われている。またわが国では、高齢者が障害を得ると「家族にお世話になるという意識が急に強くなってきて、気がねしたり、すべてをあきらめてしまう傾向がある・・・できるかぎり自立し続けよう、障害と共存しようという意識とは異なっている<sup>(3)</sup>」とも指摘されている。

このような介護者と要介護者との関係性は、介護予防の観点からは問題となる可能性を持つ。今回はこのような問題意識に立脚し、地域で生活し介護を要しない高齢者を対象に、投影法及び自尊感情尺度得点算出等の調査を行うことにより、介護者と要介護者の関係性把握の特性や、介護予防に関する課題等について検討を実施した。

## 2. 研究目的と方法

### 1) 目 的

地域で生活する介護を要しない高齢者を対象に、以下の3点を検討する。

- ① 投影法により、以下を検討する。
  - ・ 高齢者が想定する要介護者と介護者の関係性
  - ・ 高齢者が持っている介護規範
  - ・ 高齢者が想定する介護態度における、介護予防の課題
- ② Rosenberg, M による自尊感情尺度（4段階評定による10項目の尺度）邦訳版（星野，1970）得点による検討

### 2) 方 法

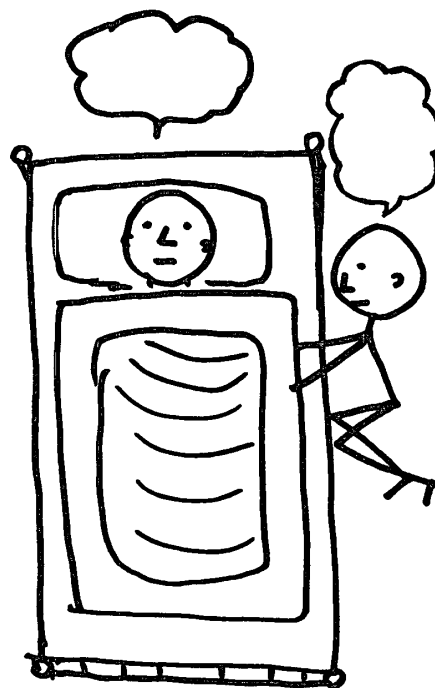
#### ① 投影法

右記の図Iを示し、以下の説明を行い、図Iの吹き出しに自由に言葉を書いてもらった。

「寝たきりの方と、その方を介護している人がいらっしゃいます。」

「寝たきりの方が何か言われています。何を言われ

図 I (Fig I) : 介護関係を示す絵



ているのか、吹き出しにお書き下さい。』

「介護者が言われていることも吹き出しにお書き下さい。』

## ② 聞き取り調査等

被験者に「父・母・夫・妻・息子・娘・嫁・ホームヘルパー」の記載のある用紙を渡し、その中から要介護者を1者、介護者を1者、それぞれ選び出してもらった。自尊感情尺度調査票：被験者が記載し、不明個所等について聞き取りを実施。

## 3. 倫理的配慮

参加者全体に調査概要・目的・調査者氏名・連絡先を説明した。さらに調査前に個別に了承を得た上で、調査を行った。

## 4. 研究対象及び期間

平成14年8月、高知県N市における高齢者教室（2回）の受講者51名。

男性（N=7, 75.4±3.0才）

女性（N=44, 75.0±5.0才）

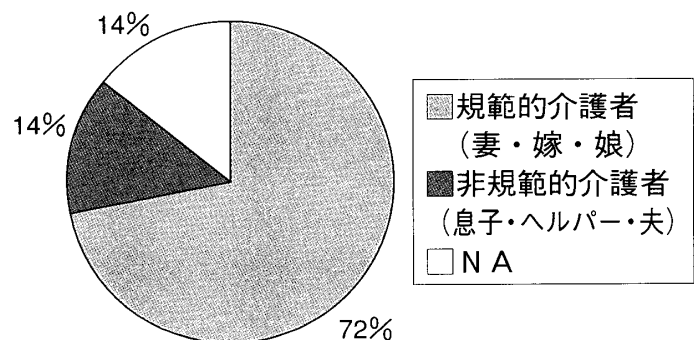
この高齢者教室は、地域で生活する高齢者を対象に、市保健管理センターが月1回開催している教室形式のものである。対象者の中に要介護者はいない。

## 5. 結 果

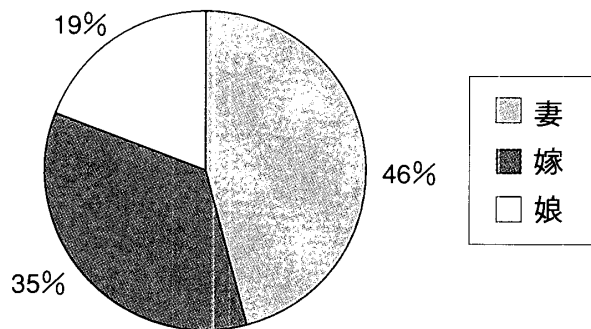
### 1) 介護者に関する介護規範

被験者が想定した介護者（想定介護者）の分類と内訳は図Ⅱのとおりであった。規範的に介護者（規範的介護者）とされている嫁・妻・娘で72%を占めていた。また、規範以外の介護者（非規範的介護者）を挙げた者は図Ⅱのとおりで7名（14%）であり、内訳は息子4名、ホームヘルパー2名、夫1名であった。規範的介護者の内訳は図Ⅲのとおりで、妻が半分近くを占め、嫁が三分の一、娘が2割であった。

図Ⅱ（FigⅡ）：想定介護者の分類内訳



図Ⅲ (FigⅢ) : 想定規範的介護者の内訳



想定した介護者と、被験者の年齢との関与は表Ⅰのとおりであった。

表Ⅰ (Table I) : 想定介護者と被験者の年齢との関与

想定介護者	N	想定被験者平均年齢
嫁	13	73.6才
妻	17	75.7
娘	7	75.0
非規範的介護者	7	79.4

\*  $p < 0.1$

\*\*  $p < 0.05$

## 2) 被験者が想定する介護態度

### ① 想定要介護者の言葉の分類

想定された要介護者が話している言葉を分類したものが表Ⅱである。「世話になる」ことをポイントに置いた「世話型」が最も多く35%を占めた。そのうち、「世話になってすまん、迷惑をかける」と「世話になる」ことについて謝罪を述べるものが半分近くを占め、次に「世話になってありがとう」とお礼を述べるものが多かった。

「痛い、苦しい、辛い、困った」と苦痛を訴える「痛苦型」が次に多く18%を占めた。

「早く元気になりたい」という「希望型」と、「起こしてください、何か食べたい」等の要求を表明する「要求型」は、16%と同率であった。また介護者に対して「あんた誰かね?」と尋ねる「運命型」は6%であった。

想定者の平均年齢と言葉の分類との関与では、表Ⅱのとおりで、「要求型」と「希望型」に比べ、「世話型」が低い傾向が見られた。

表Ⅱ (Table II) : 想定要介護者の言葉の分類

\*  $p \leq 0.1$ 

分類	N	割合 (%)	想定者平均年齢 (S.D.)	種類	N	割合 (%)
世話型	18	35.3	73.3(3.7)	世話になってすまん・迷惑をかける	8	44.4
				世話になってありがとう	5	27.8
				世話になるね	5	27.8
痛苦型	9	17.6	75.1(3.9)	痛い・苦しい・辛い	5	55.6
				困った・もうだめだ・情けない	4	44.4
希望型	8	15.7	76.8(5.8)	早く元気になりたい	8	100
要求型	8	15.7	76.8(7.1)	起こしてください・横になりたい	4	50
				何か食べたい・水が飲みたい	3	37.5
				ここ直して	1	12.5
運命型	3	5.9	75.3(3.8)	あんた誰かね	3	100
不明	5	9.8		不明	5	100
計	51				計	51

## ② 想定介護者の言葉

想定された介護者が話している言葉を分類したものが表Ⅲである。「頑張れ」とか「頑張っていて良くなってください、元気出さないさ、元気出して頑張りましょう」等の「激励型」が最も多く31%を占めた。次に、「はいはい、今すぐしますよ、～しましょうか、右ですか左ですか」と要介護者を介助するとの前提に立った言葉が「介助型」で21%であった。次に「心配いりませんよ」と要介護者の不安を打ち消す「不安打ち消し型」、「早く元気になってほしい」という「祈り型」がそれぞれ10%、6%であった。想定者の平均年齢と言葉の分類との関与では、表Ⅲのとおりで、「介助型」を想定する者の年齢が最も高く、次に激励型が高い傾向にあった。

表Ⅲ (Table III) : 想定介護者の言葉の分類

\*  $p \leq 0.1$ 

分類	N	割合 (%)	想定者平均年齢 (S.D.)	種類	N	割合 (%)
激励型	16	31.4	75.3 (4.6)	頑張れ・頑張って早く良くなって下さい	7	43.8
				元気出さないさ・元気出して頑張りましょう	9	56.2
介助型	11	21.6	77.1 (6.3)	はいはい・今すぐしますよ・～しましょうか	8	72.7
				右ですか左ですか・ここ?ここ?	2	18.2
				さすってやろう	1	9.1
不安打ち消し型	5	9.8	71.8 (1.3)	心配いりませんよ	4	80
				いいえ (心配ないの意味)	1	20
祈り型	3	5.9	71.7 (3.5)	早く元気になってほしい	3	100
その他	6	11.8		私にあんたの妻よね	2	33.3
				具合はどうですか・大丈夫かな	3	50
				概ね良くなったなあ	1	16.7
不明	5	9.8		不明	5	100
計	51				計	51

## ③ 想定された要介護者・介護者の言葉と対応関係

要介護者と介護者の言葉の対応について表IVに示した。要介護者の言葉の「世話型」「痛苦型」「介助型」の対応では「激励型」が最も多かった。要介護者の要求を表現する「要求型」では、9割近くが「介助型」での対応であった。すなわち、「～してほしい」と要求されると、「はいはい、すぐします」という献身的な態度で対応する想定であった。

表IV (TableIV)：想定された要介護者・介護者の言葉と対応関係

想定要介護者の言葉	想定介護者の言葉	N	割合(%)
世 話 型	激励型	7	38.9
	不安打ち消し型	4	22.2
	祈り型	2	11.1
	その他	2	11.1
	NA・不明	3	16.7
希 望 型	激励型	4	50
	介助型	1	12.5
	NA・不明	3	37.5
痛 苦 型	激励型	4	44.4
	介助型	3	33.3
	不安打ち消し型	1	11.1
	祈り型	1	11.1
要 求 型	介助型	7	87.5
	NA	1	12.5
運 命 型	激励型	1	33.3
	その他	2	66.7
その他・不明	その他	2	66.7
	不明	1	33.3

## 3) 自尊感情尺度得点と想定された言葉との関与

## ① 想定介護者と自尊感情尺度得点との関与

想定介護者と自尊感情尺度得点との関与は表Vのとおりで、介護者を妻とする者と嫁とする者の点数間に有意差が見られた。

表V (TableV)：想定介護者と自尊感情尺度得点との関与

\* p&lt;0.1

想定介護者	自尊感情尺度得点	S.D.
妻	30.2	10.4
嫁	37.1	7.5
娘	35.4	7.7
非規範的介護者	33.6	6.6

## ② 想定要介護者の言葉の分類と自尊感情尺度得点との関与

想定要介護者の言葉の分類と自尊感情尺度得点との関与は表Ⅵのとおりで、「世話型」と「運命型」の点数間に有意差が見られ、「世話型」と「希望型」の点数間に差が見られた。

表Ⅵ (TableⅥ)：想定要介護者の言葉の分類と自尊感情尺度得点との関与

\*  $p < 0.05$  ※  $p = 0.2$ 

想定要介護者の言葉の分類	自尊感情尺度得点	S.D.
世話型	37.1	5.3
希望型	33.4	7.7
痛苦型	35.7	12.1
要求型	34.0	6.5
運命型	26.0	14.4
不明	28.7	5.1

## ③ 想定介護者の言葉の分類と自尊感情尺度点数の関与

想定介護者の言葉の分類と自尊感情尺度点数の関与については表Ⅶのとおりで、「激励型」と「介助型」、「激励型」と「不安打ち消し型」の点数間に有意差が見られた。

表Ⅶ (TableⅦ)：想定介護者の言葉の分類と自尊感情尺度点数の関与

\*  $p \leq 0.1$ 

想定介護者の言葉の分類	自尊感情尺度得点	S.D.
激励型	34.9	8.0
介助型	29.3	8.2
不安打ち消し型	41.6	3.4
祈り型	42.0	4.2
その他	29.5	10.1
不明	36.4	6.5

## 6. 考 察

投影法は「結果を問題にするものでなく、回答の出てくる過程に重点をおいて考え<sup>(4)</sup>」るものとされる。宗方は絵画による投影法について「絵画刺激を媒介として被験者の内面を投影させようとするもの<sup>(5)</sup>」と述べている。

本研究では、要介護者と介護者の絵画を見せ、そこに生じた会話を想定することで、「介護」の問題における被験者の内面を検討した。特に、要介護者を介護する者について規定する介護規範や、要介護者と介護者の関係性について検討を行った。同時に、被験者の自尊感情尺度得点との関わりを調べた。「自尊」は「自己に対して好意的な評価を行うこと<sup>(6)</sup>」とされている。



研究の結果として、以下の点が考えられた。

### 1) 介護者に関わる介護規範

被験者は「嫁・妻・娘」を介護者と考える介護規範を持ち続けている可能性が明らかになった。しかし、80才近い高齢になると「息子・ホームヘルパー・夫」という非規範的な介護者を想定していた。このことは、高齢になるにつれて実際の介護体験を見聞する機会が増え、結果として、規範よりも現実的な介護者を選定する傾向となるものと考えられる。

同時にその結果は、自尊感情尺度得点との関係において、介護者として嫁よりも妻を選んだ被験者が、平均年齢が高いと同時に自尊感情尺度得点が低かったことにも関与すると思われる。年齢が高くなるにつれて不安感が強くなり、自尊感情が薄れていく可能性がある。同時に規範より現実を選ぶ傾向が強くなっていくとも考えられる。

### 2) 要介護者と介護者の関係性

要介護者・介護者の言葉の分類としては、「世話する・される関係」を前提とした「世話型」と「介助型」が多かった。同時に「痛苦型」と「激励型」が多かった。すなわち、本研究の被験者は、「痛苦を訴える要介護者を、激励しながら世話・介助する」という関係性を想定する傾向が見られる。

被験者の年齢との関係で見ると、想定要介護者の言葉の分類では、「世話型」の平均年齢は低く、「希望型」と「要求型」は高い。また想定介護者の言葉の分類では、「不安打ち消し型」と「祈り型」を想定した被験者の平均年齢は低く、「介助型」は高い。「激励型」はその中間である。

すなわち、被験者のうち年齢が比較的若い者は、介護関係の想定において、自分を介護者に位置づけ、「世話」を行うことを中心にして、回復を祈ったり要介護者の不安を打ち消すような役割を果たすものと想定している。また年齢の高い被験者は、自分を要介護者と想定し、「早く元気になりたい」と望み、具体的な介助を要求するような想定を行っている。介護者が介助する際に、「水飲みたい」などの要求をされたことに対して、「はいはい」「すぐしますよ」と、半ば無条件に応諾するような想定がなされていることは課題である。このような関係性の想定は、実際に介護者になった時には、無条件に世話を行う態度につながる可能性がある。さらに要介護者になった時には、そのような献身的な介護を期待する態度につながる可能性がある。

### 3) 自尊感情尺度得点との関与

想定要介護者の言葉の分類では、「運命型」の被験者の得点が低かった。「運命型」は男性2名、女性1名で、介護者に対して「あんた、誰かね (あなたは誰ですか)」と尋ねている

場面を想定していた。要介護者になれば、必ず周囲に対する認知が危うくなるものと想定しているような投影であった。

想定介護者の言葉の分類では「介助型」の被験者の得点が低く、「不安打ち消し型」が高かった。この相違は、上記のような年齢との関与や、自分を介護者と想定するか、要介護者と想定するかの相違から来る可能性もある。

#### 4) 介護予防との関与

本研究からは、投影法による要介護状態の想定において、「嫁・妻・娘の介護」という規範性や、「世話する・される」関係性の存在が明らかになった。同時に、年齢が高く不安感が強い高齢者や、自尊のレベルの低い高齢者は、介護を要しない状態の時でも、自分の要介護状態を想定する時、悲観的になりやすい可能性も明らかにされた。

以上に述べたような関係性は、実際の介護関係にも反映されると思われる。すなわち、介護者を「世話する存在」とし、要介護者を「世話される存在」として、両者の依存的関係を強固にし、介護予防を困難にすると考えられる。

地域の看護職者やその他の保健医療職者は、高齢者のこのような傾向を念頭に、介護者・要介護者の関係性など、地域の介護意識に働きかける学習活動に努力すべきと考えられる。

### 引用文献

- 1) 春日キスヨ, 介護とジェンダー, pp. 127, 岩波書店, 東京, 2001.
- 2) 同上, pp. 121.
- 3) 辻一郎, 健康寿命, pp. 106, 麦秋社, 東京, 1998.
- 4) 外林大作ら編, 誠信心理学事典, pp. 332, 誠信書房, 東京, 1981.
- 5) 宗方比佐子, 投影法による対人的価値観の測定, 教育心理学研究, Vol. 31, NO. 4, 1983.
- 6) 同4), pp. 182.